

〔夏季例会報告〕

天狗原山の植物観察会

小沢正幸

第147回例会は、北安曇郡小谷村の天狗原山一帯の植物観察会を中心に、1994年8月5日(金)・6日(土)の両日に行なわれた。今回の植物観察会は、長野県植物誌のための補充調査を兼ねており、講師に高橋秀男先生をお招きした。

参加者は、講師の高橋秀男先生、信州大学の井上健先生、宮島吉彦、橋渡勝也の両氏、幹事の池上睦美氏、小沢正幸の6名であった(観察会のみ参加者も含む)。

第1日目の5日は、夕方に宿泊場所である小谷温泉の山田旅館に集合した。懇親会では、宮島氏の持参された標本を高橋先生に同定していただき、その後、小谷村における植物分布の特徴などについて話が進んだ。その中で、木曽地方や下伊那地方と同様に、小谷村が暖温帯に分布の中心をもつ植物の分布地として注目されることなどが話題にのぼった。例として、オオバノハチジョウシダやオオヒメワラビモドキの分布などが紹介された。

第2日目の6日は、早朝に宿を出発し、妙高小谷林道の標高約1200m付近から観察会を開始した。観察は、登山道の両側を中心ににして、天狗原山の山頂(標高2197 m)まで行った。

観察を始めてしばらくは、ブナやミズナラを中心とした明るい樹林が続いた。林内の低木層には、ヒメアオキやハイイヌガヤ、ヒメモチ、アカミノイヌツゲなどの常緑低木が見られた。途中、ヤシヤビシヤクの着生したブナの倒れている場所があり、珍しくヤシヤビシヤクを間近で観察できた。登山道沿いの小さな沢の周辺では、ミズバショウやカラフトドジョウツナギ、エゾシロネ、アズマナルコ、オタカラコウなどが見られた。

標高1600 m付近の基岩の露頭が見られる尾根部では、トガクシコゴメグサやユキクラヌカボ、ヒモカズラ、アサギリソウ、チャボゼ

キシウ、ナメルギボウシ、コマイワヤナギ、ミヤマトウキなどが見られた。標高1800 m付近の草地では、イワオウギやオオカラマツ、イワハタザオ、ホタルサイコ、シナノナデシコ、ミョウコウトリカブトなどが見られた。さらに草地下部の水の染み出た場所では、タヌキランなどとともに見慣れないアブラナ科の植物も確認した。この植物は、球形に近い角果や羽状に切れ込み茎を抱いた葉身の形などから、帰化植物のミミイヌガラシを想像させた。しかし、後日調べると、ミギワガラシのようであった。その後、シロウマイタチシダやウサギシダ、ホスゲ、ハガクレスゲ、ミヤマヌカボシソウ、オニアザミなどを観察した。やがて標高2100 m以上からは徐々に高木が姿を消して、ウサギギクやアオノツガザクラ、タカネスイバ、キンスゲなどの高山帯で馴染み深い植物が見られるようになってきた。

天狗原山の頂上付近は湿生のお花畑となっており、ヒメクワガタやミヤマダイモンジソウ、ハクサンフウロ、ハクサンチドリ、ガクサンチドリ、ハクサンコザクラ、ヒメイワシヨウブ、シナノキンバイ、チングルマなどが見られた。小さな池(最終融雪地?)の周りにはエゾホソイヤタテヤマスゲ、ダケスゲがわずかに生育していた。また、この頂上付近の草地では、タテヤマアザミに似たアザミ属の植物を確認した。この植物は、基部が茎を抱いた茎葉の形や大きくうなだれた頭花、長く反りかえる総苞片などから、どちらかというところダイニチアザミに似たアザミであった。その後、登りと同じコースを急いで下山し、午後5時近くに山田旅館に戻った。そして、そこで解散となった。なお、井上先生と小沢の2名は、その後近くの鎌池と鉾池に行き、クロアブラガヤやタマミクリ、バイカモ、リュウノヒゲモなどを確認した。

最後になりましたが、ご多忙のなかおいでいただいた高橋先生、事前および当日の準備をすべて担当された幹事の池上氏、早朝出発などの我々の希望を快く引き受けていただいた山田旅館の方に深く感謝致します。